

# 琉球大学学術リポジトリ

日韓のコミュニケーションの問題 : 似た者同士の意識

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教養部 公開日: 2009-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兼本, 円, Kanemoto, Madoka メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/13930">http://hdl.handle.net/20.500.12000/13930</a>

## 日韓のコミュニケーションの問題：似た者同士の意識

兼 本 円

### 1. はじめに

日本人はアメリカ人との接触を異文化間のコミュニケーションと捉え、中国人とのコミュニケーションも同じく捉えることだろう。しかし、韓国人との場合は同じ程度の異文化間のものとしては捉えてはいない、もしくは、そう捉えることにためらいを感じているようである。同様の意識は韓国人も抱いているようだ。

それは両国間で「似て非なるもの」もしくは「近くて遠い国」のフレーズが韓国文化と日本文化を比較する際のキーワードとして定着していることから窺える。これらの定着度の高さは両者を正しく見極める際に邪魔にさえなると述べる者もある程であるが(金, 1988, p99-100)、「近くて遠い国」や「初めてなのに懐かしい」は日本の旅行会社のキャッチフレーズとしても定着しているらしい)しかし、この種のフレーズはただ単に日韓の文化がどこか似ているという意識の程度を超えて、お互いが錯覚する程であることを語っている。よって、コミュニケーションの当事者である韓国人と日本人の意識が同一文化間なのか異文化間の行為なのか判然としなくなることが考えられる(双方外国なのだから異文化と見なせて当然とする期待は希望的観測に過ぎない様である。二つのフレーズはいづれも実際に日韓のコミュニケーションに従事したものが生んだ言葉なのである)。

本論では先ず、日本と韓国の文化がどの程度似ていると捉えられているのかを紹介し、次に、この意識の曖昧さ、同一文化間なのか異文化間なのか日韓のコミュニケーションにどのような問題を生じさせるのかを考察し、最後に問題解決の試案を提案する。

### 2. どの程度似ていると捉えているか

1973年に日本で開催されたシンポジウム、「日本にとって韓国とはなにか」

の議論の一つとして日韓の関係を外国同士なのか血縁同士と捉えるべきなのかが上がった（「血縁」はただならぬ類似を意識しての語彙選択であることは明らかである）。参加者全員が日本人の韓国問題の専門家であり、その多くが実際に韓国人と関わりを持った者であったが、意見の一致は見られないままであった。1992年の「日韓フォーラム」において李（元韓国文化相）は韓国と日本は対立したものをそのまま受け入れる発想の素地を持っていると強調している。その論拠は多岐に渡るが、卑近な例として日韓の両国語の語彙を挙げている。両語に存在する「出入り口」や「昇降機」の様な語の前後の要素は対立概念だがそれが一語にまとめられていることを説明している。梅原（国際日本文化研究センター所長）も同フォーラムで両国が「森の文化」と「田の文化」の二つを共存させていると指摘し、お互いの思想的近さを説いている（1994）。文化人類学者、祖父江は12点の韓国文化論及び韓国人論を分析し、韓国人の特徴として指摘されているものの中にも日本人の特色でもあるものが多い、と結んでいる（1990）。ジャーナリストの加瀬は英米の文化的類似を日韓の関係を例えている（1990, p. 28-29）。岡崎（元韓国大使）は韓国を「一番近い親類」と表現している（1990, p. 172）。リービ英雄（英語を母語としながらも日本語で小説を書き、「万葉集」の英訳者としても知られる）はアメリカ人が80年代の日本を50年代のアメリカになぞって見る以上に、日本人が韓国を語る時に、韓国と昔の日本とをなぞらえて見がちであると述べている（1992, p. 155）。韓国を初めて旅行した黒田の妻は韓国人は「日本人が失ってしまった情感」を持っている、と感想を述べている（1978, p. 318）。以上、韓国人と日本人は歴史的関係と容姿を除いても、一般的にもミクロな専門的にも文化的類似を指摘するものが多いことを記した。次にこの視点の囚われがどのような問題をコミュニケーションにもたらすかを考察する。

### 3. 障害としての似たもの同士の意識

在日韓国人作家、呉は韓国人と日本人の意志の疎通の躓きはお互いが異文化であることを意識できなくなるためだと述べ、鄭、原尻との鼎談では似ている

がゆえにお互いの価値観を通じ合えるものと思いこんでいると主張している (1994, p. 150; 1992, p. 229)。

さらに、日本流のコミュニケーションと韓国流のコミュニケーションの部分的一致を呉は渡部との対談で「お互いに同質性の中の異端を相手に感じて嫌な気分になってしまう」と日本人と自身の初期の接触を振り返って述べている (1993, p. 27)。ジャーナリストの黒田は「…相手を自分と同じだと思ってしまう、そこからお互いが外国 (人) であるにしては注文がきびしかったり、無理な要求や期待をしてしまいがちです」と述べている (1988, p. 4)。

田中は日本人にとって西欧人とその文化は異質なもので超えがたい異質感・隔絶感があって韓国人とその文化にはあいまいな隔絶感があるのではないかと考えている (1981, p. 22)。つまり、無意識に後者との距離は短く思い、相手の心を知ろう、相手の立場に立って考えようと思う。しかし、相手とのささやかな会話、接触、または情報に触れて相手の心が分かったと思ひ込み、その後には心をつかんだの者の行動なのでそれ以上こまかく考察されることがない。この種の思ひ込みを経て日本人に取って韓国人の心は分かったことになっているのである。氏によれば、この様に日韓に存在する隔絶感の曖昧さが精神の弛緩をもたらし、次元の高い相互理解を阻んでいるのである。一般に思われている相互理解の促進剤としての文化的な近さが日韓のコミュニケーション上の障害になることを指摘している。似ていることがコミュニケーションを容易にしないのならば差異に気づけばよいのだろうか。

### 3. 1 単純化される差異、自己主張のイメージ

似た者同士の囚われは相手の独自性である差異の存在に気づいてもそれを単純化させて捉えるか、非難の対象へと見なさせがちである。例えば、韓国人は日本人に比べて自己主張が強いと言われているが、この論拠は単純に韓国人はアメリカ人にたいしても自己主張をするからとの一般的観察に基づく。この特徴づけが良く表現された例は林の指摘する様に「韓国人はアメリカ人とうまがあう」である (1982)。さらには韓国人はこの点で日本人より国際的であるとの見解まで生まれる。しかし、それは呉の指摘する「同質性

の中の異端」に与えた間に合わせの評価でしかない（呉・渡部，1993，p. 27）。アメリカ人的・国際的の評価は一見差異を正当に評価するように見えるが、そこには「アメリカ人に対しても日本人に対しても全く同じ理由で自己主張をする韓国人」との単純化され「融通の利かなさ」とのイメージが残される。実は韓国人の自己主張の強さは「異なる者」（アメリカ人）と「似た者同士の間」（日本人）との関係を中心に考えるならば融通のなさとは別の評価が可能である。

ベイトソン（Bateson）流に「関係」を考えるならば、complementary relation（相補関係）とsymmetrical relation（対称関係）とに分けることができる。相補関係ではお互いの特徴がコミュニケーション中に増幅することがある。例えば、元々声の大きな者が声のか細い者と話していると、前者は後者に声を大きくしてもらうために、または声のか細さを遠慮と受取り、本来の声の大きさよりさらに声を大きくする。後者は相手の声の大きさを激情と受取り前者に声を小さくして落ち着いてもらうために、本来の声の小ささよりさらに小さくする（この種の現象をBatesonはcomplementary schismogenesisと呼んでいる，1972，p. 68）。この現象は日本人とアメリカ人の間のコミュニケーション現象として想像にかたくないが、この特徴の増幅は段階的に進行すると思われる。しかし、似た者同士の間（symmetrical relation）、日韓では双方の特徴は段階を経ることなく、またはより早く現われると考えられる。当然その段階省略の理由は似た者同士なのだからコミュニケーション上の特徴も同じであるとの思い込みと、肝心な部分の話に移りたい気持ちの現われである。韓国人の自己主張の「なれなれしさ」や「遠慮のなさ」という非難のレッテルもこのようなコミュニケーション上の特徴として捉えれば、むしろ「親しみの率直な表現」と解釈できる。尹、黒田、関は以心伝心の度合は日本の方が韓国より高いのではないかと考えている。その根拠は韓国人が感覚的な控え目な表現よりも思考の表現を頻用することである。例えば、日本人は自己主張するさいには「私は何々と感じる」との表現を好み、韓国人は「私は何々と考える」の表現を好み、ということである（1988，p. 258-259）。前者の表現は「感ずる」という動詞表現で主張の論理性が薄らぐが、後者の表現は動詞「考える」が論理性そのま

まを表立たせているとの結論からだと思える（この説明は省略されているが、推論可能である）。

この考察は日本人と韓国人に共通する「以心伝心」を出発点とするが「感ずる」対「考える」を間接と直接表現の枠から解いて考えるとどうなるか。いづれも人間関係を中心に考えると、「感ずる」の表現は個人の自由であり最も否定しがたい表現で、「考える」の表現は方法と視点の問題で個人的ではなく、否定しやすい。「考える」の表現を韓国人は好むということ自体、「感ずる」の表現には自己主張の弱さではなく否定のしがたさがあるため話が一方的なままに終ることを懸念してのことではないか。自己の考えを即座に述べるという特徴は相手にそれを願う前に自ら先にそうする「親しみの素直な現われ」との評価の余地を残している様だ。日韓にある他の差異も既成の枠組みのみから検討されて単純化されたレッテルを貼られているのではないだろうか。この単純化は次に挙げる勉強不足と不可分である。

### 3. 2 似た者同士の勉強不足

似た者同士はお互いに親近感を抱かせるが、同時に既知のものであるとの錯覚からくる安心感は双方に勉強不足をも定着させる。誤解が生じて初めてお互いがそれぞれの文化について勉強不足であったことに気づく。しかし、「知らなかった」は異文化と峻別できる間では許容されても日韓のような似た者同士ではことは逆である。日本人側の無知は無関心と受け取られ、さらには日本人の韓国文化にたいする評価として誤解されがちである（知らない理由は知るに値しないとの評価に類推される）。一般的に人は異文化から何かを学ぼうという心構え、または異文化接触から何かを学べるだろうとの期待感を持っている。関は異文化間コミュニケーションと最も関わり合いの深い文化人類学も異なるものへの興味を出発点としていると指摘している（1989, p. 14）。当然、似た者同士がお互いから何かを学ぼうという意識は一般的に希薄である（例外として古典への情熱があるが、それも現在の文化と古の文化の間に多少なりの異文化を感じるからではないだろうか）。日本の婦人が韓国を初めて訪れて韓国の女子高生が日本の女子高生と一見なら変わらないことにがっかりするとい

うエピソードはそのことを端的に物語っている (1990, p. 134-135)。先述の韓国人の特徴としての自己主張の強さをさらに追及すると日本人との共通点を見出すことが可能である。「自分の意見をはっきりと表現しながらも、韓国人は語尾をにごしたり、いいきらないことがある。とくに、目上とか初対面の人に対して多くみられる。それは、遠慮や儒礼からきた慎み深さによるもので、日本的な間接表現とは本質的にちがう。」(金, 1993, p. 89)。金の考察は韓国人の一特徴として定評になったものでも日本人の勉強不足が原因であることを示唆している。さらに、勉強不足は相互に共通する軽視の問題へと繋がる。

### 3. 3 似た者同士の軽視

Social Exchange Theoryは対人間コミュニケーションを物品の交換として捉えることから出発している。Roloffの説明によれば、人は意識的にせよ無意識的にせよインターパーソナル・コミュニケーションに、お互いが持つ価値あるリソース(資源)をより多く得るべく臨んでいる(1981, p. 30)。この理論も他のものと同じく複雑な人間の営みであるコミュニケーションを充分には説明できないが、似た者同士のコミュニケーションの問題、特に佐々木の「(日本人の)無知からくる韓国人軽視の風潮」として一掃されがちな解釈をより客観的に説明してくれる(1987, p. 22)。

この理論におけるコミュニケーション中の「価値ある資源」とは、時にはコミュニケーションそのものである場合がある。例えば、媒体となる言語が一方に取って外国語で他方には母国語である場合がある。日本人とアメリカ人の英語を媒体とする会話である。日本人に取っては日本にいて「本物」の英語を聞き話せること自体が価値あるリソースを得たことになる。また、このコミュニケーション行為そのものを学習と見なす場合にはさらなる付加価値が付くことになる。しかし、聞き手のアメリカ人に取っては日本で英語を使用すること自体にはその様な価値は付加されない。コミュニケーションを通して得られる情報にこそ価値があり、その時初めて公平な取引としてのコミュニケーションが成功したと言える。それでは、このアメリカ人が日本で学ぶ他の外国人と英語を媒体としてコミュニケーションに従事する場合はどうだろう。他の外国人は

自国との比較からなる日本文化の評価という情報（価値あるリソース）を提供してくれる。時にはこの価値あるリソースは媒体となる英語の形式的不正確さを無視できる程の価値を持つ場合がある。

話を日本人と韓国人のコミュニケーションに戻す。お互いが似た者同士であるという囚われは、両者のコミュニケーションを公平な交換、満足するコミュニケーションになるはずはないとの固定観念を接触する以前に定着させる。異文化間コミュニケーションで得られ易い先程の価値あるリソースとしての日本・韓国文化の評価という情報はどうなるか。これもお互いが似た者同士であるという囚われが価値を下げることになる。

同じものは比較できないし、もしくはそれによって得る情報は「似たり寄ったり」のつまらぬものだと思うからである。文化的に似たり寄ったりであるとの一つの論拠として言語的類似が挙げられる。

### 3. 4 似た者同士の考え方と発想

この類似がコミュニケーションに及ぼす影響は見逃すことができない。言葉が違えば考え方や発想も違うだろうとの意識はサビアとワアーフの仮説を持ち出すまでもなく予想されることである。英語を母語とする者の考え方や発想は日本語を母語とする者のそれとは違うであろうとの考えは極めて一般的である。同じく、日本語に近い韓国語を母語に持つ者の考え方や発想はよく似ているであろうとの思い込みもごく自然である。

さらに考え方の違いや発想の違いがあるにせよ大同小異で、お互いの言語を学ぶことで乗り越えられる程度のものであり思い込まれるのも自然である。しかし、この思い込みは逆に外国語学習者によくある語彙選択の誤りすら考え方や発想の違いとして受け取られる危険をはらんでいる。例えば両語に存在する敬語である。日本語の敬語は相対敬語で韓国語のそれは絶対敬語である（森下・池, 1992, p. 115）。際だつ違いの一つは、前者では話者の身内でないものに対して敬語が使われ、後者では話者の身内であっても敬語が使われることにある。例えば、韓国語では話者自身の父が不在の場合に「お父様はいらっしゃいません」との表現が正しい。日本人学習者が「父はいません」と誤るのは当



然と言えよう。しかし、日本人のこの種の誤りも言語学の知識を持たない韓国人から見れば単なる学習上の誤りとは受け取られず、「敬の心」の不完全さとして誤解される可能性がある。日本人の韓国語学習者にとってこの種の誤りは身内に対する謙譲が働くためでもあるが、森下・池による現代韓国語の謙譲表現の希薄さを考慮するならば既述の誤解も根強いものと思われる（1992, p. 119-120）。考え方や発想が同じであるとの期待は「うらぎられた」時でも「差異の単純化」を経て誤解を定着させ、さらに共感についての錯覚をも共起させる。

### 3. 5 似た者同士の共感の錯覚

共感（empathy）が異文化間コミュニケーションにおいて重要な役割を果たすことに疑いの余地はない。ハウエル・久米はコミュニケーションの観点から「他者が認識したり感じたりすることを再現する能力」と定義している。「再現」とは他者の経験を想像できることまでを含めている（1992, p. 11）。この共感ということについて日本人は日韓のコミュニケーション上どう考えているのだろうか。

既述のシンポジウムの中で市村は日本人は韓国の関係を外国として捉えれば、相手と同じ立場になれないばかりか、「心の通い」が犠牲になると述べている。その根拠は韓国人が日本人を外国人として見なしてはいないからだとの氏の経験に基づいている（1974, p. 122）。この心情が日本人の韓国人とのコミュニケーションに関する共感を代表するものとは言えないが、田中の説明する日本人には「韓国人のこころ」を知ろう、「韓国人の立場に立ってものを考えよう」との考えを示唆するものである（1981, p. 21-22）。この期待はわずかな会話の成功を共感できたことと思ひ込む危険をはらんでいる。共感への期待が強いと同時に日韓のコミュニケーションにはお互いの持つ嫌悪への不安が存在する。

### 3. 6 似た者同士の嫌悪

日本人が韓国の側の歴史教育が反日感情を煽っているのではないかと不安を

抱くのは当然な疑問である。この日本人の不安を韓国人の方もコミュニケーション中に気にすることもあるだろう。しかし、高崎は韓国唯一の高等学校の国史教科書1989年版と1990年版を検討し、いずれも反日感情を煽るものとは受け取れないことを報告している（1994）。大槻は1990年発行の韓国国定国史教科書（中学校用）の内容を検討して反日教育よりも民族主義的主体の形成に力点を置いていると評価している（1992）。

これらの報告は反日感情を歴史的視点のみに絞っている落ち度がないものかを考えさせる。反日または反韓感情も似た者同士のコミュニケーション上の苛立ちにも起因しないだろうか。荒木は多くの日本人と韓国人がお互いを好きでも嫌いでもあると感じて、その一因を韓国を外国として割り切ってしまうことができないことにあると指摘している（1992, p. 12）。先述の独自性への非難に加えてこの種の嫌感を歴史的な原因とのみ見なすことは双方のコミュニケーションに未来がないとの意識を植え付けかねない。

次に日韓のコミュニケーション問題の解決策として提案されているものを検討する。

#### 4. 提案された解決策の問題

呉はよき日韓の関わり方は日本流の「相手との必要な距離をとって」関わるのがよいと考えている（1994, p. 158）。しかし、そこには双方が相手との距離を保ち続けてコミュニケーションを続けられとの矛盾があるし、それが日本流であるとするならば韓国流のコミュニケーションを差し置いていることにも無理がある。また、本論で指摘してきた似た者同士の意識がもたらす問題の解決にはならない。

別の解決策としてお互いを異文化として見直そうという提案がある。古田は「日本人にとっては、お隣の韓国からが外国の始まりである」と、韓国人を異文化の人と捉えることを相互理解の第一歩として提唱している（1986, p. 193）。しかし、これも異文化と見なせることができなくなる程の類似性をお互いが持っていることを差し置いた立場でしかない。さらに、そこには異文化間の方が同一文化間コミュニケーションより容易であるという思い込みが潜んで

いる。確かに、対人間コミュニケーションは大まかに同一文化間と異文化間コミュニケーションの二つに区分することができるが、しかし、この区分は意志の疎通を図るもの同士の意識を正確に反映するものではない。同一文化間の者同士でも会話中にお互いの考え方に大きな違いを感じ異文化の距離を感じる場合もあり、そう思っていた者同士が後半にはこの距離感を払拭するかの様な同一文化内の親近感を感じることもある（似たようなことが異文化間のコミュニケーションにも見られる）。

日韓のコミュニケーションはこの様な意識の振幅が最も複雑である。よってこの「異文化視」の提案も似た者同士の問題解決とはなりがたい。暫定的にせよ他のアプローチを提唱する。

## 5. おわりに

これまで似た者同士の意識がいかに日韓のコミュニケーションの障害になりやすいかを考察して、この意識が両者の間で、恐らく、拭いされないものであることも理解できた。ならば相互理解への方法とはむしろこの意識を生かすことである。試案としては両文化の持つコミュニケーション上の共通点の中にある差異を分析し明らかにすることである。そうすることによって、似た中での差異をバリエーションとして捉える意識を育むことができる。究極的にはお互いの文化が将来取り入れることの出きる可能性としてお互いを認識できるのではないだろうか。日韓の交流がますます盛んになる現在、古田の予想する通り韓国人が日本人の特性を「お手本」にすることもあるだろう（無論、韓国のコミュニケーション上の特徴を日本が取り入れることも考えられる）。それは一見して共通する部分が増大すること、似た者同士の意識が強化されることを意味する。その際、誤解をより少なくする為にも、手本とされて似てしまうことの中にも相互の文化がもたらす差異が存在することを双方で確認しておかなければならない。その一環として日韓の礼儀がもたらすコミュニケーション上の問題を稿を改め検討する。

## 参考文献

- 荒木和博 (1992) 『愛し哀しき韓国よ』 亜紀書房
- Bateson, G. (1972) Steps to an ecology of mind. New York: Ballantine Books
- 尹学準・黒田勝弘・関川夏央 (1988) 「あらゆる場所が面白い」 尹学準編  
『ソウルA to Z』 252-284
- 古田博司 (1986) 『悲しさに笑う韓国人』 人間の科学社
- 祖父江孝男 (1990) 「韓国人の行動と意識——今日までの諸研究の比較考察」  
杉山晃一・櫻井哲男編 『韓国社会の文化人類学』 弘文堂 124-140.
- グディカンスト・ウィリアム・C (著) ICC研究会 (訳) (1993) 『異文化に橋  
を架ける』 聖文社
- ハウエル・ウィリアム・S 久米昭元 (1992) 『感性のコミュニケーション』  
大修館
- 林建彦 (1982) 『近い国ほど、ゆがんで見える』 サイマル出版会
- 加瀬英明 (1990) 『「恨」の韓国人「畏まる」日本人』 講談社
- 金両基 (1993) 『能面のような日本人』 中央公論社
- 金永熙 (1988) 『韓国の悲劇・日本人の誤解』 新森書房
- 黒田勝弘 (1988) 『ソウル発これが韓国だ』 徳間文庫
- 黒田春海 (1978) 『海峡は河なのに』 角川書店
- 大槻健 (1992) 『韓国教育事情』 新日本新書
- 岡崎久彦 (1990) 『隣の国で考えたこと』 中央公論社
- 呉善花 (1994) 『向い風』 三交社
- 呉善花・渡部昇一 (1993) 『日本の驕慢・韓国の傲慢』 徳間書店
- プロッサー・マイケル・H (著) 岡部朗一 (訳) (1982)  
『異文化とコミュニケーション』 東海大学出版会
- リビー・英雄 (1992) 『日本語の勝利』 講談社
- Roloff, M. E. (1981) Interpersonal communication: The social exchange approach.  
Beverly Hill: Sage Press.
- 佐々木勝 (1987) 「韓国」 象の会編 『アジア・ウォッチング』 ダイヤモンド社

関三雄（1989）『文化の気まぐれ』フォー・ユー

高崎宗司（1994）『「反日感情」韓国・朝鮮人と日本人』 講談社

田中明（1981）『常識的朝鮮論のすすめ』朝日新聞社

鄭仁和・呉善花・原尻英樹（1992）『「差別」の本質を語り合う』『現代』  
228-235

東京・韓国研究院国際関係共同研究所（1974）『日本にとって韓国とはなにか』  
日新報道出版部

在日本韓国文化院（1994）『日韓文化論』学生社

## Summary

# Problems of Intercultural Communication Between Koreans and Japanese: Intracultural or Intercultural Communication ?

Madoka Kanemoto

The theme of the paper is to investigate how the perception of cultural similarities between Koreans and Japanese hinders communication between the two nationalities. First, how much the two cultures has been perceived as similar is introduced. Second, further negative (perceptual) problems which stem from the perception are described. They are: simplicifation of differences, lack of interest in learning about the other culture, low regard for the other culture, purported identical ways of thinking, empathic illusion, and mutual hatred. Third, existing solutions are examined. Finally, one tentative solution, to examine differences among similarities, is offered.